優秀賞

【特別活動】

目的意識を起点に、「生かす」視点から活動を創り出す生徒

岐阜県本巣市立真正中学校
佐伯（さえき） 康輔（こうすけ）

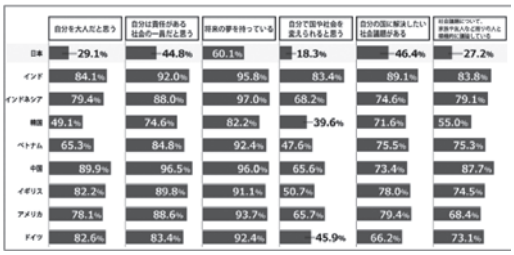
1 はじめに

（1）子どもは有能である

教員として歩み始め14年目を迎える。子どもたちの言葉や姿に幾度も感動し、時に自らの想像を超える素晴らしさに圧倒され、「子どもにはすごい力がある」と感じている。「すべての子どもは有能な学び手である」（奈須 2021）と言われるように、子どもたちは学ぶ意欲と力を備えた優秀な学び手であるが、「創造性」という観点からみれば「子どもはみな有能な創り手である」とも言えるのではないだろうか。しかしながら、私が本校で見てきた（実践してきた）教育活動、特に特別活動において、その有能さが生かされているとは言い難い。以下のような実態が根強く残っている。

- 当番活動に終始している。
- 過去に創られた活動がそのまま受け継がれ、活動もその価値も形骸化している。

このような現状は、「本巣市」の「真正中学校」に限った問題なのだろうか。18歳意識調査（日本財団 2019）からは、全質問項目で日本は軒並み低い水準であることが見て取れる。特に低さが際立つのは「自分で国や社会を変えられると思う」という項目である。このような結果の背景には、日本の教育における創造体験の不足が大きく関わっているということを、私たちは重く受け止めなければならないと感じる。



	自分を大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を変えられると思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、家族や友人など身の回りの人と積極的に議論している
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

図表1 日本財団による18歳意識調査

（2）MSJがもつ可能性

岐阜県内の中学校では、規範意識啓発推進委員会として「MSJ（マナーズ・スピリット・ジュニア）」という組織があり、本校でも毎年多くの生徒が加入している。しかし先述の実態と同様、固定された生徒で形骸化した活動を行うに留まっていた。そんな中、昨年度から生徒指導主事としてMSJを担当することとなった。MSJには、活動の型がない。だからこそ生みの苦しみを伴うが、自らが創り出した活動は、学校のみならず、地域をも動かせる可能性をもっている。MSJを通じて生徒には自らの力で活動を創り出し、新たな道を拓いて欲しい。そして、その喜びを体感して欲しい。そう強く感じた。

2 活動を創造するために

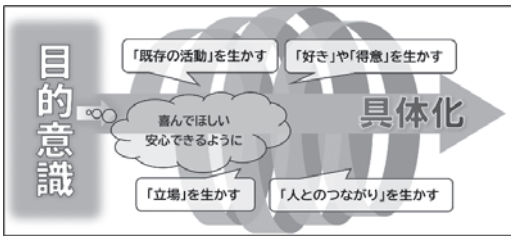
子どもがいくら有能でも、何もない状態から何

かを創り出すことは容易ではない。創造には「起点」と「視点」が必要となる。私自身の経験を振り返ると、子どもが主体性を発揮できるのは以下のような条件を満たした時であったと認識している。

- 目的意識（誰のため、どんな気持ちになって欲しいか）が明確である
- 生徒のよさや得意が発揮できる
- 仲間や大人が協力的であり、応援してくれる（人とのつながり）

これらは、OECDが新たな価値を創造する力を構成する要素としても「目的意識」「好奇心」「協働性」（白井 2020）と類する言葉で示されており、「起点」と「視点」になりうるものと考えた。このうち、目的意識の明確さは起点として作用し創造を貫く軸となるもの、以下2点は「生かす」ことで創造の足掛かりとなるもの（視点）と捉えた。なお、あるものを「生かす」という点に着眼した時、既存の活動や立場を「生かす」ということも活動を創り出す有効な視点となるのではないかと思案した。創造の「起点」と「視点」を下に整理した。

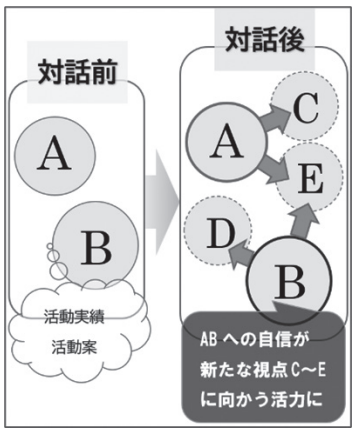
起点	視点
目的意識 校区で生活する人の安心と喜び	①好きや得意を生かす ②人とのつながりを生かす ③既存の活動を生かす ④立場を生かす



図表2 創造過程の構想①

また梯子モデル(Hart 1997)と太陽モデル(OECD 2019)には、生徒主導の段階においても「大人（教師）とのパートナーシップの下で協働して意思決定を行う」とあり、生徒の主体性が高いレベルでも教師の役割は明確に位置付いている。そこで、教師である私自身もファシリテーターとして先述の過程に加わり、生徒との対話の中で「起点」に立ち返ったり、「視点」を広げたりできるような問いかけを行うこととした。

しかしながらMSJの母体は大きく（令和6年度は98名、7年度は104名）、担当する教師1人では、生徒らの力を引き出し続けるには限界があると感じた。そこで本研究実践では、高校生や他校の教師といった「人生の先輩」との対話を設定し、生徒がフィードバック（活動に対する価値付けと新たな視点の提示等）を得られる場を位置付けることとした。そこで得た自信や視野の広がりは、活動を創り出す新たな活力となるのではないかと考えた。



図表3 創造過程の構想②

3 研究仮説及び研究内容

1、2の思案のもと、次の研究仮説及び研究方法を立てた。

【仮説】
目的意識を起点に4つの視点から活動を構想すれば、活動を創り出すことができる。また、生徒より経験を重ねた「人生の先輩」との対話におけるフィードバックをきっかけに、新たな活動を創り出すことができる。

【研究内容】
① 目的意識を起点に、４つの視点から活動を創り出す。
② 「人生の先輩」からのフィードバックから活動を創り出す。

4 研究実践の具体

本項では、令和６年度９月から令和７年度10月の取組を取り上げる。

研究内容① 実践例Ⅰ 令和６年９月20日 体育祭前のグラウンド清掃

9月下旬、目前に体育祭を控えたある日、１年生生徒Aから以下の提案があった。

運動場の石が飛び出してきていて、競技する人の中に怪我する人が出てくるのが心配です。だから、グラウンドの石をきれいにしたいです。僕一人でやろうと思うのですが。

この言葉から「全校生徒が安心して競技ができるようにしたい」という目的意識が伝わった。同時に視点②（人とのつながりを生かす）が加わることで、Aの目的はより具現化するのではないかと考えた。そこでAに以下の問いを投げかけた。
「一人でやろうという気持ちは頼もしいけれど、力になってくれる誰かと共にやることで、よりきれいになるのではないかな。」
この問いに対してAは、
「全校に関わることだから、ＭＳＪだけじゃなくて、全校に呼びかけたいです。その中で思いをもった人と共にやりたいです。」
と答えた。Aは原稿を作り、翌日の給食時の全校放送で全校生徒に向けて募集をかけた。翌朝、１年生の生徒を中心に、30名程の生徒と１年生の職員が活動に参加し、約30分間共に汗を流した。活動後、Aは、
「こんなに集まってくれるなんて思っていなくて、びっくりです。」
と語り、その日の放送で全校へ感謝の気持ちを述べた。
【考察】Aの中で芽生えていた目的意識を具現する過程において、視点②が新たに加わることで、全校生徒を巻き込んだ活動を創り出している。そしてその広がりは、結果的にA自身の喜びにもつながっている。目的意識が活動を創り出す起点となっており、視点②が有効に働いていることが見て取れる。

写真1　活動を行う生徒Aら

研究内容① 実践例Ⅱ 令和６年１０月22日 小学校でのハロウィン挨拶活動

本校区には２つの小学校があり、特に真桑小とは距離が近い。すでに７月に生徒の提案で、始業前に真桑小で挨拶活動を行っていた。10月、２年生の生徒Bから再び、
「また真桑小で挨拶活動をして、小学校の子たちに喜んで欲しいです。笑顔が見たいです。」
という提案があった。対話する中で、Bが話した目的意識に立ち返りつつ、視点①（好きや得意を生かす）から、
「小学校の子に喜んでもらうために、挨拶活動の中でBさんならどんな工夫ができるかな。」
と問いかけた。BはＭＳＪの仲間としばらく考えた後、次のように答えた。
「ハロウィンが近いから、挨拶してくれた子に折り紙でプレゼントを渡したいです。」
その後、Bは事前に小学校に活動目的と内容を伝えると共に、全校放送で参加者を募った。当日の朝は１～３年生の約30名の生徒が参加し、

生徒はBが仲間と作成したプレゼントを渡しながら挨拶活動を行った。活気ある挨拶と、プレゼントをもらった児童の笑顔が溢れる時間となった。

【考察】目的意識にこだわりつつ、視点③（既存の活動を生かす）を基盤としながら視点①から活動内容を構想することで、Bの感性や得意が生かされ、活動が創り出されている。また、視点②は活動規模の広がりにつながっている。

写真2　活動を行うBらとプレゼントを受け取った児童

研究内容② 実践例Ⅲ 令和7年1月17日 教師との対話

1月17日に本校で行われた生徒指導連絡協議会では、市内の生徒指導主事を中心に43名の教師が集まった。授業参観後、ランチルームにて「先生と語り合う会」を開催し、集まった教師と1年生のMSJの生徒（30名）が対話を行った。なお、生徒には次の観点から考えをまとめ、主体的に対話が進められるように指導を行った。

今、自分が頑張っていること。
これから「やってみたい」と思っていること。
今、困っていること。

対話の中で生徒はこれまでの活動を報告すると同時に、「こんなことをしてみたい」と未来に思いを馳せながら語った。また、教諭からは価値付けがありつつ、自校の取組や経験を踏まえ新たな視点を投げかけていた。次は対話後の生徒Cの感想である。

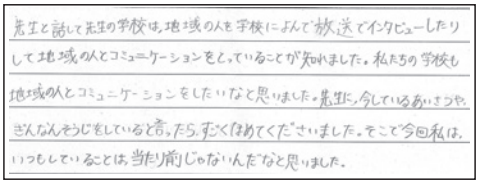

先生と話して先生の学校は、地域の人を学校によんで放送でインタビューしたりして地域の人とコミュニケーションをとっていることが知れました。私たちの学校も地域の人とコミュニケーションをしたいなと思いました。先生に、今しているあいさつやきんなんそうじをしていると言ったら、すごくほめてくださいました。そこで今回私は、いつもしていることは、当たり前じゃないんだなと思いました。

写真3 対話後のCの感想

後日、Cから「お世話になる方にインタビューをしたいです。」と提案があった。その後も対話を重ねる中で、Cは給食の放送時間に以下の「地域でお世話になる方」を呼び、インタビューを行うことに決めた。

・毎朝横断歩道で交通指導をしてくださる教育委員会（社会教育課）の先生
・校区を見守ってくださる交番の警察官

事前に教育委員会と交番に連絡を取り、「どんな願いをもって私たちのために活動をしてくださっているのか」「真正中の生徒のよさはどんなところか」など、生徒が自ら考えた質問内容を事前に伝えて当日を迎えた。また、インタビュー後には、MSJより感謝の手紙を贈呈した。

写真4　活動するCら

続いて以下は、対話後のDの感想である。

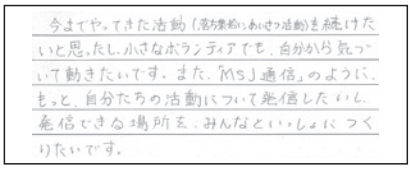

今までやってきた活動（落ち葉拾いあいさつ活動）を続けたいと思ったし、小さなボランティアでも、自分から気づいて動きたいです。また、「MSJ通信」のように、もっと、自分たちの活動について発信したいし、発信できる場所を、みんなといっしょにつくりたいです。

写真5 対話後のDの感想

Dは教師から「活動を発信するとよいのではないか」という助言を受け、「MSJ通信で活動を発信したい」という願いをもった。対話を受け、Dは令和7年の1月と2月に活動内容と自らの思いをまとめ、通信で全校生徒へ伝えた。

MSJ新聞

MSJ 発行
加藤 亜豪

上の写真は、「部分バレンタイン挨拶」の準備をしている様子です。一年MSJの山原悠程さんや山口快晴さんが放送で呼びかけ、沢山の子が自発的に集まってくれました。特に、一年三組の子が沢山参加してくれました。一年三組の松原拓志さんは、「楽しく活動できて、よかった」と話してくれました。「沢山の子が仲間の呼びかけに応え、学校を明るくしたい」という思いで活動してくれたのだと分かりました。私もMSJとして仲間と共に、学校を明るくするために、できることを沢山考えて、提案していきたいです。

写真６　作成した通信

【考察】Ｃが感想に記した「地域の方とコミュニケーションをしたい」という思い（起点）は、教師のフィードバックをきっかけに生まれている。また、Ｃが活動を創り出す過程を見ていくと、対話の中で生まれた「起点」が具体化し、活動の具現につながっている。ＤもＣと同じく、対話の中で教師からのフィードバックがあったことが感想から見て取れ、その対話をきっかけに「通信を作成して、全校生徒にＭＳＪの活動を発信する」という活動を自ら創り上げている。

研究内容① 実例Ⅳ 令和７年４月８日 対面式での新入生への歓迎コンサート

２月初旬、ＭＳＪの1年生生徒Ｅらと朝の挨拶活動を行う中で、来年度の活動に話が及んだ。そして、

「新入生の子たちには、安心して真正中での生活を始めてほしいな。」

「新入生の子に向けて、ＭＳＪとして何かできないかな。」

という話になった。その思いを受けて生徒Ｅらへ、

「入学する1年生のために何ができるかな。」

「あなたたちの得意や立場を生かすとすれば、どんな方法がよいかな。」

と起点と視点に根差した問いを投げかけた。すると生徒らは、

「新２年生のMSJという立場を生かして、来年の対面式で発表をしたい。」

「FさんやＧさんのピアノの演奏は素敵だから、対面式で聞いてみたい。」

「ディズニーとジブリの曲はみんなも好きだし、私たちで演奏したい。」

「ＭＳＪを劇で知ってもらいたい。」

「劇なら、Ｈさんたちができそう。」

「小学校の時みんなの前で歌ったことがあるから、私歌えます。」

と自分たちで対話を紡ぎ、構想を膨らませていった。初めは不安な気持ちも垣間見えたが、「私たちなら実現できる」と次第に現実味を帯びていくことが分かった。

その後も生徒同士で粘り強く対話を重ねた結果、４月に生徒会主催で行われる対面式の場を借りて、次の方法で新1年生に歓迎の気持ちを伝えることになった。

- 寸劇にBGM（ピアノや木琴）をつけて、ＭＳＪや真正中の活動について紹介する。
- 馴染みのある曲を歌い、思いを伝える。
- 新３年生にナレーションをしてもらう。

準備を進めて迎えた令和７年度の４月８日。対面式におけるＭＳＪの出番は12分ほどだったが、大きな歓声と盛大な拍手が体育館に鳴り響いた。

対面式後、Ｅは次のように語った。

「私たちは、去年の対面式のことは正直、あまり思い出せません。でも今年の１年生の子たちは、対面式のことを絶対に忘れないと思います。私もたちもこの会のことを一生忘れません。」

写真７　対面式で寸劇と歌唱（演奏）を披露する生徒

【考察】Ｅを中心に「新入生に安心してほしい」という目的意識にこだわりながら、同級生や生徒会とのつながり（視点②）や特技や好きなこと（視点①）、新２年生のＭＳＪとしての立場（視点④）を手掛かりに活動を創り出している。また、そう

いった創造過程における営みが目的の具現につながると共に、Eらの喜びを生み出していると言えるだろう。

研究内容① 実践例Ⅴ 令和7年7月5日、15日 地域でお世話になる方への感謝の会

5月に「第1回ＭＳＪ推進委員会」を開催し、全校のＭＳＪ推進委員が案を出し合った。その中で、「地域の方に感謝を伝えたい」と記述する生徒が見られた。その思いを受けて生徒に、
「地域で感謝を伝えたい方は、どんな人かな。」
と問うと、生徒らは青少年育成推進員と民生児童委員の存在を挙げた。そこで、「地域の方に感謝を伝える会」の開催を周知して参加者を募る中で、両者を学校へ招き、それぞれ会を催すことが決まった。

青少年育成推進員への感謝の会では、３年生の生徒10名が主催者となり、
「どのような方法で感謝を伝えるか」
という目的意識のもと企画が始まった。生徒Ｉが、
「私たち合唱が誇りだから、自信もってできるんじゃないかな。」
と口火を切ると、
「感謝なら『愛を込めて花束を』かな。」
「プレゼントするなら、育成員さんが活動する時に、身に付けられるものがいい。」
「ミサンガとか、いいんじゃない。材料が家にあるし、私作れるよ。」
などと対話を重ね、構想が練り上げられていった。当日は10名で合唱を披露し、手作りミサンガの贈呈をすることになった。当日は4名の推進員を中学校に招き、昼休みを用いて会が催された。互いに笑顔と感謝を伝え合う温かな時間となった。

写真８　推進員へ感謝を伝える生徒

民生児童委員を招いて行われた会では、２年生の生徒５名が主催者となった。委員の方にお世話になった場面を思い出したり、願いに思いを馳せたりと、目的意識を起点に「感謝」の中身を確かめていった。当日は歌唱や合奏、手作りのメッセージカードの贈呈などを行い、感謝の気持ちを伝えた。

写真９　民生児童委員への感謝の会

【考察】この２つの会の起点となり、軸になっていったのは、いずれも、
「どうしたら感謝を伝えられるか」
「相手に喜んでもらえるのか」
といった目的意識に根差した問いである。しかし、創り出される活動はそれぞれの個性が溢れたものになった。それは、目的を具現するために生徒らが生かせると考えた「得意」や「好きなこと」が異なるからである。いずれの創造過程においても、視点①が有効に働いていることが見て取れる。

研究内容① 実践例Ⅵ 令和７年７月 第1週 ＭＳＪ主催の学習会

6月下旬、授業が終わった後に３年生生徒Ｊと期末考査について雑談する中で、
「私たち３年生が主催で、１、２年生に向けての学習会を開催してみたいです。」
という提案があった。理由を聞いていくと、
「１年生の子は初めてのテストが終わって勉強方法に悩んでいる子もいると思う。自分もそうだったから力になりたいです。」
と自らの経験を踏まえながら、会に込められた思い（目的意識）を吐露した。
「Ｊさんは、何が教えられるの。」

と問うと、
「私は、社会なら教えられます。でも、数学は不安だから、Ｋさんにお願いしたい。」
と話した。するとＪから呼ばれたＫは、
「数学なら大丈夫。やってみたい。」
と答えると同時に、
「理科はＬさんが得意だから頼もう。」
と輪がつながり、活動が具現化していった。

この会は７月第１週の月、水、金曜日の３回、昼休みを使って開催された。Ｊが給食時の放送で１、２年生に参加を呼びかけると共に、Ｋはポスターを掲示して参加を促した。３日間で約４０人の生徒が参加し、真剣で和やかな雰囲気の中で開催された。

写真10　学習会の様子

【考察】３年生という立場を生かし（視点④）、「１、２年生の力になりたい。」という目的意識のもと、生徒が創り出した学習会である。また、ＭＳＪの中でのつながりを生かし（視点②）、同時に生徒一人一人の得意分野を生かした（視点①）からこそ実現したものと捉えている。

研究内容② 実践例Ⅶ 令和７年９月12日 高校生との対話

教師との対話（実践例Ⅲ）を終え、生徒Ｍから、
「高校生とか、もう少し年齢が近い人たちとも話してみたいです。」
という思いを聞いた。「誰を呼びたいか（呼べるか）」等Ｍと対話する中で、本校を卒業した２名の高校生（Ｍの兄と同級生）を呼べることとなった。事前に活動や困り感などを高校生に伝えた上で当日を迎えた。対話にはＭＳＪの１年生６人、２年生５人が参加し、学年ごとの各グループに高校生を配置して行った。

２年生グループでは、生徒が活動実績を伝えた後、
「挨拶活動をしても広がらない。」
という悩みを吐露した。高校生からは
「やっていることは本当にすごいから自信をもってやればいい。みんな協力してくれるはず。」
「もっと先輩や後輩、先生とか色んな人たちと思い切ってつながってみたらどうか。」
と価値付けと新たな視点の提示があった。

写真11　２年生グループの対話

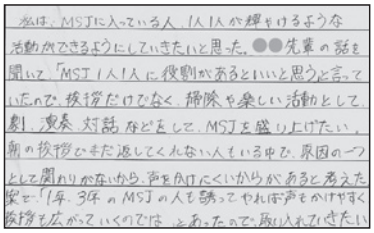

私は、MSJに入っている人、1人1人が輝けるような活動ができるようにしていきたいと思った。●●先輩の話を聞いて「MSJ 1人1人に役割があるといいと思うと言っていたので、挨拶だけでなく、掃除や楽しい活動として、劇、演奏、対話などをして、MSJを盛りあげたい。朝の挨拶でまだ返してくれない人もいる中で、原因の一つとして関わりがないから、声をかけにくいからがあると考えた姿で「1年、3年のMSJの人も誘ってやれば声もかけやすく挨拶も広がっていくのでは」とあったので、取り入れていきたい

写真12　対話後のＭの感想

このフィードバックをきっかけに、生徒Ｍは対話に参加した仲間と共に、少しずつつながりを広げていった。まずは自ら他学年の教室へ出向き、ＭＳＪの仲間に挨拶活動の意図や自らの思いを伝える姿があった。また、Ｍから相談を受けた生活委員長は、委員会でその話題を取り上げ、
「自分たちにもできるかことはないか。」
と委員と対話を行った。その結果、前期最終週に挨拶運動を行うこととなった。

そういった動きを受け、さらに生徒Ｍは全校放送で挨拶運動について呼びかけ、参加を募った。この活動にはＭＳＪのみならず多くの生徒や教師も参加し、全校が一体となった挨拶活動が展開された。

【考察】高校生の「自信をもってやればいい」「みんな協力してくれる」といった価値付けと、「先輩や後輩、先生とのつながり」という新たな視点の提示を受け、やや停滞していた生徒Mらの活動が動き出した。その動きが生活委員を動かし、今度は生活委員の動きが生徒Kを動かし、活動が全校へ広がるなど、前向きな動きの連鎖が生まれている。Mらが全校を巻き込んで創り出したこの活動の源は、高校生との対話におけるフィードバックと言える。

研究内容① 実践例Ⅷ 令和7年9月27日 介護施設でのふれあい活動

7月に行われた民生児童委員を招いた会（実践事例Ⅴ）の後、会を主催した2年生生徒Nから、
「今度は私たちが地域に出向いて、もっと色んな人とつながりたいです。」
という提案があった。理由を聞いていくと、
「祖母が施設に通っていて、自分が行くと他の人も喜んでくれるんです。活動を考えて私たちが行けば、お年寄りの方は絶対笑顔になってくれると思うんです。」
と思いを吐露した。そこで、この生徒Nが主催者となり、校区の介護施設「デイサービス温咲南」と連絡を取り、9月27日に訪問して活動を行うこととなった。全校のＭＳＪに参加者を募ると、１年生4名、2年生1名、3年生1名の応募があり、そこにNを入れて7名での企画が始まった。

発案した生徒Nは、
「低学年の時、『言うこと一緒やること一緒ゲーム』をやったことがあって、動きも激しくないから楽しくできると思う。」
「『以心伝心じゃんけん』っていうのを去年の学級レクでやってみんな楽しそうだった。頭を使うだけじゃなくて動きもあって、リフレッシュできると思う。」
など、これまでの経験を踏まえ、相手に思いを馳せながら実現可能な活動を模索していった。迎えた当日は、自らが企画したいくつかの案を基に、相手の様子を見つつ、臨機応変に活動を展開していった。7名の利用者と共に活動を創り上げていくNの姿がそこにはあった。

写真13　活動するN

また、生徒Oは活動について考える中で、
「絵が得意だから、それを生かして何かできないかな。」
と具体を思い描き始めた。しかしその後、
「でもその場で描くのは時間がかかるし、一方的になるかもしれない。」
と悩み始めた。そこで、
「Oさんの好きなことを生かして、お年寄りとも一緒に楽しめることってあるかな。」
と問うた。すると当日、Oは花の塗り絵を持参し、活動後半、利用者と共に活動をし始めた。初めはレクレーションに前向きでなかった男性の利用者も、生徒と共ににこやかに塗り絵に取り組む姿があった。活動後、生徒Oに意図を聞くと、
「塗り絵なら私も好きだし、私が好きなら相手も楽しんでくれると思いました。」
「花の塗り絵にしたのは、心が穏やかになって和んでくれると思ったからです。」
と教えてくれた。

写真14　活動するO

【考察】Nが創造した活動を見ていくと、目的意識を明確にもち、相手の立場に立って考える中で、視点③を大切にしたことが分かる。そして、その

起点と視点から利用者と共に創り出した活動が、「笑顔になって欲しい」「元気になって欲しい」という目的を実現している。Oは、一度は視点①から活動を思案したものの、目的意識に立ち戻り、それ故に悩んだ。その中で、教師の問いを足掛かりに視点①から活動を再考した。思考の末に創り上げた活動は、利用者の喜びにつながったと捉えている。単に訪問して活動するのではなく、目的意識を起点と軸にし、一人一人がそれぞれにあるものの生かし方を考え、工夫を凝らすことで、唯一性のある活動を創造していると言える。

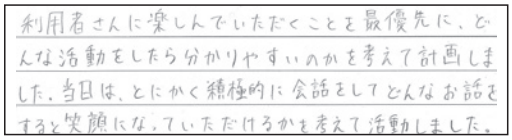
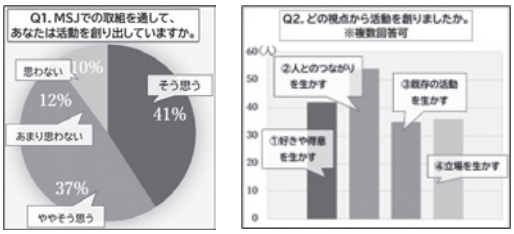

利用者さんに楽しんでいただくことを最優先に、どんな活動をしたら分かりやすいのかを考えて計画しました。当日は、とにかく積極的に会話をしてどんなお話をすると笑顔になっていただけるかを考えて活動しました。

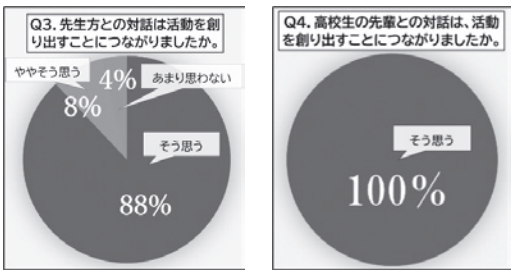
写真15　活動後のOの感想

5　成果と課題

令和7年10月9日、対象生徒に調査を行うと、次の結果が得られた。



図表4　調査結果①　※1～3年生101名



図表5　調査結果②
※Q3は2年生30名、Q4は1、2年生11名

Q1から、全体の78%が肯定的に評価しており、多数の生徒が「活動を創り出した」と自覚していることが分かる。また、Q2を見ると、活動を創り出す上で視点の①～④が効果を発揮しており、特に②の視点の有効性が高いこと、複数の視点を組み合わせて活動を創り出す傾向が高いことが見て取れる。Q3、4からは、データからも「人生の先輩」との対話の有効性の高さが伺える。

以下に本研究実践の成果と課題を記す。

○目的意識は起点になるだけでなく、立ち返る軸としての役割を果たし、どの活動の創造過程においても有効に働いていた。(研①)
○目的意識から自分を見つめ、視点を駆使したり、それらを組み合わせたりしながら活動を創造していた。また、教師の意図的なファシリテートにより、視点が有効に作用し、活動を創り出す足掛かりとなった。(研①)
○教師や卒業生(人生の先輩)との対話では、「価値付け」と「視点の提示」が相乗効果を生み、活動を創り出す活力源となっていた。(研②)
●多様な人材の活用方法や個性の生かし方をさらに模索し、生徒らの創造性を引き出していく。

6　参考文献、参考資料

・奈須正裕：個別最適な学びと協働的な学び、東洋館出版社 (2021)
・白井俊：OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来、ミネルヴァ書房 (2020)
・日本財団：18歳意識調査(2019)

7　終わりに

「創造」に挑戦したこの1年半を振り返ると、「子どもはみな有能な創り手である」と確信すると共に、私にとっても忘れられない日々となった。現在3年生のMSJを中心に、地域を巻き込んでの文化祭の企画が進んでいる。生徒の躍動は止まらない。共にまた、新たな道を切り拓いていきたい。